

# 宗門から見た立正大学の問題

望 月 一 靖

一九六九年から七〇年にかけての最大の問題は安保問題と大学問題である。前者の方は自民党が、日米安保自動継続延長をほのめかしながら待望の三〇〇議席を獲得し、心中ひそかに我が事なれりと目論んでいるようであるが、しかしこれもまだまだ一波乱も二波乱もありそうである。後者の方は、政府権力が臨時大学措置法案を強行成立させ、権力でもって一時的には学生をおさえこんだようでもあるが、しかし学生の問題提起が、「大学の自治とは何か」あるいは「大学の本質とは何か」というような大学を根底からゆさぶるような問題であるだけに、大学も政府権力と学生との間に立ってその苦悩ははなはだしいものがある。そのため各大学から独自の改革案がいろいろ提起されているにもかかわらずいまだ決定的といわれるようなものがないのが現状である。

わが立正大学もこのような波の中で、公的に、あるいは

私的に改革が考えられているのであるが、残念ながら、いまだ、宗門からの立正大学に対する批判・意見を余りきいていない。しかし、それでも宗門の立場からの立正大学に対する意見が金くなかったというわけではない、たとえば「立正大学と日蓮宗は現在では法人格が異っているのであるからもはや宗立大学ではない」「立正大学はもう僧風教育としての意義がないのであるから宗門は手離なしてしまおう方がよい」などの意見を私はかつて聞いたことがある。しかしこのような意見をもつ人達は少くとも立正大学が日蓮精神を基盤において教育と学問研究がなされる大学として存在していることを忘れた、無責任な発言ではないだろうか。創価大学の発足がまじかに迫った時点で巨大なマンモスと化した立正大学に対して発言することは火傷をするかも知れないが、あえて問題の提起をおこなってみよう。

一、立正大学の進む二つの路線

戦後立正大学が、旧制の単科大学から、学生数の増大を狙ってペイする学部として経済学部を設置した時から問題は始まった。それは立正大学が今後どのような方向を歩んで行くかという矛盾対立した二つの路線である。その一つは宗立大学として仏教大学として——もっとも宗立大学、仏教大学という言葉の中に含まれた個々の人のイメージは実にさまざまであるが——旧来の伝統を守りながら戦後日本社会の中で、ある特殊性をもった特徴ある大学として発展するか、それとも仏教大学というような古い感覚のものはだんだん切り捨てて、一般大学として発展させるかという二つの路線である。ここでは、前者を宗立大学路線、後者を一般大学路線と呼ぶことにする。

戦後の立正大学のさまざまな問題は、経営の問題も含めてすべてこの二つの路線の間のあるときはあらわな形でまたあるときはかくされた形で相剋であったと見ることでできよう。そして残念ながら現在、四学部・一課程として、大崎と熊谷に校舎を持つマンモス——もっともまだマンモスの赤ん坊位の大きさだが——大学になる過程は宗立大学路線が一般大学路線に押し流されてきた歴史である。

いまかりに、このまま一般大学化路線がこのまま進められていくとすればどうであろうか。立正大学が、日本文化

発展の一翼を荷って健全に発達するならば、そこには何等問題はない。しかしそのためには立正大学は多くの問題をかかえこみすぎているようである。

## 二、立正大学の問題点

まづ第一は経営上の問題である。戦前、宗門からの援助金を中心に経営していた立正大学が、戦後、日蓮宗そのものの弱体化からその援助金はあてにすることはできなくなり、そこで、経営の困難を打解するために、多くの学生が集る学部・経済学部を設置した。たしかに学生は増え、収入は増えたのであるがこれに伴う設備の拡充、人件費の増大にしたがって借入れをする、借財は増える。学生を多く入学させる、また設備がたりなくなる、借入れをするという悪循環がおこなわれたのである。これは戦後単科大学から、学部設置をおこない総合大学に転換した、後発大学と呼ばれるものの共通した特徴である。いまや立正大学は設備がまだ充分といえない状態の中で、その借財は約四〇億に達しようとしており、経営部の方は授業料収入で一杯にやっつけていけるとしても、臨時部の方は、借財の返済よりもその利子に追われようとしているのである。しかも経営の一端を荷っている筈の宗門の方は、大学予算のわづ

か一多強の援助金をだしているだけであり、その余りにも急な成長とその危機に對して手をこまねいているだけというのが現状であろう。このまま進めば借財はますます増加するだけということになりかねない。

さて、経営上の問題が悲觀する程のもでなく、健全化されていったとしても、なお次の問題がある。それは大学の存在理由の問題である。戦後の大衆社会状況の中であらゆるものの特質が失われ、すべてのものが画一化され平均化・均質化されてきた。大学も同様な傾向にあった。ある理念によって設立された日本の私立大学は戦前においては夫々が特色をもった存在であり、その特色によって学生は学校を自から選択したのである。しかし戦後新制大学として発足したすべての私立大学を襲った経営の困難等によりその特色は薄れ、どこの大学でも同じ様な傾向をもつものとなってしまった。学生はただ名の売れた、就職率の高い大学を選択の基準にしている者が大部分であった。

しかし最近一方ではこの平均化の波がすくおしすめられる中で再び存在の特殊性独自性が問われはじめてきた。これからの大学も再び戦前より以上に強烈な特色をもたない限り、その存在理由を失うことになるであろう。立正大学を一般大学化していくことはまさに平均化の

方向であり、後発大学が、戦前からの総合大学と同じ土俵の中で特色をきそい合うということは疑問である。以上いろいろな問題をあげればきりがなが、二つの根本的な問題をあげて、立正大学が一般化していくことに疑問をもつのである。しかしこのような疑問は立正大学の中にいるものは、多かれ少かれもっている筈であり、それにもかかわらず立正大学は結果的には一般大学の方向に傾斜していかなければならぬというところが最大の問題であろう。そしてこのような状況を生み出したその最大の犯人は、経営に責任をもつ日蓮宗であるといわなければならない。

### 三、宗立大学とは何か

仏教大学か、一般大学か、この相反した二つの方向は経済学部をはっきりした方針をもたず、経営上の一時しのぎという観点から安易に設置したことから問題は発したのであるが、今迄はこの二つの路線のいづれをとるかということに余り表面にではこなかった。しかし大学の現在の危機的状況の中ではっきりと明確な目的意識をもって大学はそのどちらを選択するのか意志決定しなければならなくなってきたのである。それは多分本年一杯には決定しなければならぬものとなると考えられるし、また早ければ早い程

結果がよいといえるであろう。大学がその方向を決定してしまつてからでは、宗門があわててももう遅い。この際、宗門は真剣に立正大学についてその存続を援助するか、あるいは、手離すかを考えなければならぬ時がきたようである。

「立正大学を卒業して寺にかえつてきて多少しも僧侶として役に立たない。一体立正大学はどんな僧風教育をやっているのか、これでは宗門にとって立正大学は必要ない。」これは宗門からの立正大学に対する批判の最も多いものであろう。しかしこの意見は余りにも立正大学の現状を知らさざる。たしかに立正大学の前身は檀林であり、僧侶養成のためのものとして発足したものである。旧制立正大学の時代も日蓮上人の三大誓願を建学の精神として多くの寺院子弟を集めて僧風教育を中心として教育と学問がすすめられてきたことはたしかである。この頃は宗門は立正大学の設立の目的を、僧侶養成の大学であるとはっきり認識していたようである。しかし現在ではこの点に関してはどうであろうか。立正大学の学生数一万数千人、その中で、寺院子弟で僧侶になることを志している学生は一体何人いるであろうか、その数は、これは推測であるが、ほんの数%であろう。他の大部分の学生は、寺とは無関係な者ばかり

である。このように学生の数だけでみても、立正大学を僧風教育の場と考えることの、むづかしいことがわかるのである。

それでは宗門として立正大学をどう考えなくてはならないか。一つはもう立正大学は僧侶養成機関として役にたたまつて、僧風教育の中心である宗学科、あるいは仏教学部全体を身延短大のような所にうつして僧侶養成を専門にやるべきである、ということが考えられる。立正大学を僧侶養成機関と考えるならば、一つのプラグマチックな意見といえよう。しかし、これは、宗門の将来にとってはたして有効であろうか。

現在の立正大学でさえ宗門の子弟で優秀なものは立正大学をさけて他の有名大学に行くという風潮が見られる今日このような僧侶養成のみの大学をつくつた時、それは宗門子弟に対してどの位魅力ある存在となるか疑問であると同時にこの考え方には大きな問題がある。このような考え方の根本にあるものは「僧侶」というものに対する安易な考え方があってはなからうか。それは現在の形式化した仏教学を勉強し、宗学を学び、法要、儀式がある程度でできれば、それで僧侶であるという安易さである——もっとも現在

これだけでもできれば本宗では立派な僧侶になってしまうのが、悲しい現実であるかも知れない——しかしここで安易というのは内容の自己反省なしに、形式のみ整えようとするいき方を指すのである。宗教科、あるいは仏教学部だけきりはなしてしまうことはこの形式主義をますます助長してしまうことになってしまうのである。

ここで余り宗門には知られていない立正大学内の学生の動きを見てみよう。「大法輪」の三学長の座談会では坂本学長は、立正大学には現在何も問題はないといっているが実は問題がないのではなかった。

一昨年から昨年にかけて立正大学も他大学と同様に、全共斗系の学生達によって多くの問題が提起され、これに対して、学校側、あるいは、体育会系学生・民青と、それぞれ立場からこれに対して反発が起り、多くの混乱があった。また昨年秋季には校庭で新学期——創価学会系の学生団体——の結成がおこなわれその数は一〇〇名位、現在の勢力は二五〇名位ともいわれている。これ等一連の事件の中で仏教学部の学生はどう動いたのであろうか。実は何んの動きもなかったといつてよいであろう。提起された問題は大学そのものの存在に対して、あるいは学生それ自身の問題として重要なことがらであり、またその一連の事件の中

では、考えなくてはならないような問題が多々あった。それにもかかわらず仏教学部の学生の多くは、これらの問題を横目でみて、みてみぬふりをして通りすぎてしまったのである。たしかに学長のいうように問題はなかった。しかし実は問題のなかったことが問題なのである。このような重要な問題に対して、立正大学の象徴である仏教学部の学生が、何の発言もせず、なりゆきにまかせきりで、主体性のある行動がとれなかったということは、日蓮精神をどの程度まで身につけたのか、甚だ疑問である。他の仏教系大学ことに大谷、竜谷大学では、立正大学の仏教学部に相当するような学生達のなから親鸞精神とは何かというような宗門大学そのものに対する疑問が投げかけられ、また、大谷大学の金松学長は、大谷大学人はよき宗門者となるよりは、むしろよき宗門批判者になれといひ、また、大谷大学はよき宗門批判者をつくる場所であるともいっている。ここには親鸞精神がいまなお脈々と続いていることがうかがえるのである。立正大学では刺激の多い現在でさえこのような状態であるのに、仏教学部を切り離して温室に入れれば、ますます、形式化してしまうのではなからうか。

#### 四、立正大学の問題は宗門の問題

立正大学が今後の進路の岐路に立たされたかと考える見地から、とりあげるべき多くの問題の中で、とくに、財政の問題、学生の数、および質の問題を指摘してみた。一般大学化することには前述のように限界があり、また大学の数が多過ぎる現在、何の特色もない一般大学をもう一つ増やすことは、大学の本質が問いかけられている今日、何の意味もないことである。しかし、財政上では宗門の能力の限界をこえ、内容では大きな変質をおこしている現在、宗門がここで立正大学を経営することの意味をもう一度根底から考えなおさなければならぬ。

まず宗門が立正大学を今後も今迄以上に責任をもって経営し続けなければならないその意味を考えてみよう。

①、まず第一に、立正大学は、仏教学部も含めて単なる僧風教育の場であり、僧侶養成機関であるとの認識は誤りである。立正大学は、建学の精神にもみられるように法華経精神——日蓮の精神——を弘通し、これからの社会をリードする法華経精神のエリートをつくる重要な場である。これは単なる僧侶養成よりも宗門にとって、もっとも重要なものである。

②、宗立大学の内容は一体何か、一般に宗立大学というと、そこには何等かの仏教行事が行なわれ、学生がそれに

参加するということが考えられるが、それがはたして宗立大学としての仏教大学のあり方であろうか。いままで宗立大学、あるいは仏教大学と呼んできたが、それは前述のような意味ではない。宗立大学とは、その経営に責任をもつと同時に、その建学の精神である日蓮精神のその姿勢に宗門として責任をもつことである。そこには形式化した仏教色などは必要もない筈である。

③、その日蓮の精神を失ってしまったのは大学ばかりではない。宗門それ自身も、日蓮の精神を失ってしまったている。今日、日蓮の精神に復帰するには、ここで強烈な日蓮への問いかけがなされなければならない。鎌倉時代に何故日蓮は旧来のイデオロギーを捨て、新しい理念をうちださねばならなかったか。日蓮のその新しい理念は、当時の民衆のどの立場に立ってその姿勢は形成されたのか。そしてその理念が時代を超えて今日まで生きつづけてきているのは何故か。こうした問いかけと、強烈な自己反省こそが、これからの客観主義でない教学の生れる地盤であり、それによって大学の、宗門の姿勢が正される筈である。それには宗学科だけきりはなした形の温室では、強い新しい教学の花は咲かない筈である。

④、こう考えてみると立正大学の問題は、同時に宗門の

問題でもある。それは車の両輪のようなものであり、宗門がもし立正大学を切り捨てたならば、それは激動する社会の中でますます形骸化の方向をたどることになってしまうのである。宗門は、日蓮の精神へ復帰——形式的な復帰は時代錯誤でしかない———するためにも、その中心となるべき立正大学の姿勢に責任をもたなければならぬ。

## 五、立正大学再建の試案

しかし、現在の立正大学がすでに宗門の手におえない程にマンモス化し、変質してしまっていることは確かである。この認識のうえにたつて、なお、立正大学を考えると、いろいろな方法が考えられるであろう。以下に挙げたことは本当の思いつきであり、実現には、なお多くの問題を整理しなければならないがその一つの試案を考えてみよう。

立正大学の根本の問題は先づ財政の問題である。そこでその経営の基礎となるべき基金が必要である。宗内には、立正大学の他に宗立ではないが、日蓮主義を標榜している学校が数多くある。例えば身延山短期大学・立正女子大学・立正学園短期大学・東京立正等々、これらの共通点はすべて経営の問題で悩み、その姿勢が崩れようとしていると

いうことであろう。これ等はすべて、日蓮宗にとって日蓮主義の重要な伝道場である。檀信徒より以上に、将来のことを考えれば宗門にとって重要な伝道場である。その意味で、これ等を財政的に援助する財団、たとえば、日蓮主義教育援助財団をつくり、その援助金募集を宗内の檀信徒に直接よびかけ、また日蓮系宗教団の信徒にもよびかけることである。このような財団を設立するためには、その基本金のある場合、ない場合と、いろいろな問題もありまた政治的な問題、あるいは現在ある立正育英財団との問題等が考えられるが、しかし、これはあながち夢ではないと考えられる。

次に、日蓮精神への復帰における最重要な問題としての立正大学仏教学部宗教科の問題である。これからの宗門寺院の僧侶の多くは、この学部、学科を卒業した者であるに違いない。現在の宗学科は高等学校を卒業してすぐ四年制の宗学科に入り卒業していく制度になっているのである。あのむづかしい宗学が、高等学校を卒業してすぐの者に真に理解できるであろうか。いきおいそこでは、受けとる側は、形式的にならざるを得ないし、教える側も、それにあわせなければならぬのではなからうか。人間の生死をあづかる医者になるのに、六年間の勉強とその後、現場研修

(インターン)、國家試験という過程を経るのである。末法の導師として人間の生き方をあづかる筈の僧侶が、これでよいのであろうか。日蓮聖人は叡山で八宗を兼学し、その後には独自の考えをうちだした。これから僧侶になる者は現代の思想をまづ研究し、その後、はじめて日蓮教学に触れ、その中で、行・学の双方から、この末法を指導できる世界観としての日蓮教学を充分に身につけてなければならぬ。そのためには、現在の宗学科の年限をもっと延長しなければならぬであらう。そうすることによって教学も現在のような客観主義から脱出することができ、新しい教学が生れるであらう。

その他これ等と関連して、任職の再教育の問題、非任職群の政治参加の問題等々種々考えられるが、紙数の問題もあり、またこの次の機会にゆづりたい。

いづれにしても、宗門は従来のような無責任な態度を自己批判し、責任ある姿勢と体制を急速に実現しなければならぬ。これまでのように、その任に当らされた者だけが苦勞するというようなことでは、立正大学ばかりでなく宗門それ自体も崩壊してしまふであらう。時代は宗門人全体の強い自己批判・自己反省を要求しているのである。